

LETTER

GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO

Contents

1. 旅立ち、そして新しい世界へ
2. 修了生のメッセージ
3. みずほ証券寄附講座シンポジウム「金融商品とフィデューシャリー・デューティ」報告開催
4. 公共政策大学院博士後期課程設置—高度な研究能力を持つ実務家の育成に向けて/トピックス&編集後記

旅立ち、そして新しい世界へ

9月16日午後、GraSPP秋期学位記伝達式がダイワユビキタス学術研究館ダイワハウス石橋信夫記念ホールで挙行され、17ヶ国26名の修了生が、スーツ、ワンピース、袴、ガウンと、晴れの日にふさわしいでたちで式に臨みました。アカデミックガウンを着用した飯塚院長が式辞を述べたあと、出席者ひとりひとりに卒業証書を手渡すと、修了生は晴れやかな顔で受け取り、院長と握手を交わしました。その光景を親御さんやごきょうだいが後ろでこやかに見守っていました。この日に合わせて、初めて来日されたご家族もいらしたそうです。GraSPPに送りだし、学生生活を支えてくれたご家族に、感謝を込めて拍手を送る一幕もありました。



GraSPPでの日々の掉尾を飾る、思い出に残る式になったことと思います。



9月21日午後には、秋期入学の学生対象のガイダンスが法学部1号館21番教室で行われました。出席者は専門職学位課程への入学者が50名、新設の博士課程入学者は6名でした。新入生は受付を済ませると決められた席に着きましたが、そわそわ落ち着かなさそうだったり、前後の席でおしゃべりしたり、見知った顔を見つけて旧交を温めたり。不安ながらも新しい環境へのわくわくするような期待が感じられて、微笑ましい光景でした。大学院系の職員の司会進行のもと、院長の挨拶、出席した先生方の自己紹介が終わると、コース、履修登録の方法などの説明がありました。休憩を挟んで在学生在がガイドを務めたキャンパスツアーも実施しました。また、この前日には留学生のみを対象としたガイダンスも行われています。



どのイベントでも、学生だけを見ていると、ここが日本だということを忘れそうになります。GraSPPでは外国人学生の比率はすでに4割を超えました。さまざまなバックグラウンドの人材を養うには、GraSPPを巣立っていった修了生はそれぞれの新しい世界で、そして新入生はGraSPPという新しい世界で、ぜひこれらの資質を発揮してもらいたいと思います。(編集担当)

修了生の メッセージ

公共管理コース修了 片桐 紀子



今年9月、お陰様で公共管理コースを修了することができました。休学制度等を何度か利用し、平成23年の入学から5年かかっての卒業となりました。家族介護や自分自身の病気・事故などを経験し、学業に費やせる時間が入学前に望んでいたほど確保できなかったのは残念ですが、自分を取り巻く環境がどんなに変化しても、置かれた状況下で最善を尽くし前進していくことが大切なのだ実感できました。

在学中、一番苦労したのは学習計画等のスケジュール調整です。通学できる曜日が限られていたため学びたい科目が履修できなかったり、学期の途中から出席できなくなったり、試験当日に欠席せざるを得ない事情が発生したりと本当に大変でした。自宅での学習時間が十分取れないこともあり、通学時の電車内も貴重な勉強場所となりました。

時間に制限のある中でもGraSPPで体験できるユニークな学びの機会にはできる限り参加しました。GSDMプログラムの授業では、工学や医療分野などの学生達との合同プロジェクトを通じて問題解決に対する文理統合的なアプローチを知り、MPP/IPコースの授業で友達になった留学生とは各々の国の事情や政治などについて熱く語り合い、非常に刺激のある環境で学ぶことができました。この5年間、様々な人との出会いにより、また、多くの方々のご支援により、学業及びそれ以外の面でも成長することができました。先生方、職員の皆様、クラスメート、そして家族にも心から感謝しています。

GraSPPを卒業し、ここからが新たなスタートです。現在は、在学当時から携わっている米国国防総省関連の教育コンサルティングを中心とした仕事や自治体への政策提言に寄与する活動などを行っています。これまでの経験とGraSPPで学んだことを実践に繋げ、いかに社会に還元していくかが自分自身への課題となりますが、これからも失敗を恐れず挑戦していきたいと思っています。



Stefano Berriel da Silva, Class of 2016, MPP/IP

My experience with GraSPP was quite exceptional. If I may say so myself, I came to Japan in April 2013 as a MEXT-sponsored research student at the University of Tokyo and at that time already had MPP/IP as a clear goal. The reasons were threefold. First, its marked interdisciplinarity appealed to me as I strongly believe that the challenges faced in global, national and local orders are of multifaceted in nature and, as such, cannot be dealt with under the boundaries of academic disciplines. Second, I was keen on deepening my understanding of Asian and Japanese studies, which are largely absent in Brazilian academia, and GraSPP's focus on Asian perspectives and experiences seemed like a natural fit (with the bonus of being based in Tokyo!). Third, the promise of a professional degree committed to bridging theory and practice across a variety of fields certainly met my aspirations to make contributions to the real world (i.e. beyond the ivory tower that the academia can sometimes be).

During my 2+ years at GraSPP I can safely say that my expectations were met. It was rather motivating to be able to re-take some of the courses that I had audited as a research student and notice how the contents and approaches had been modified not only to update references but especially in response to the different goals and motivations of each new batch of students. I particularly enjoyed the engaging debates that took place in Professor Takahara's course on Chinese politics and diplomacy, which consistently went beyond class hours, as well as Professor Nishizawa's arrangement of guest lectures and networking opportunities both inside and outside the classroom. I also value very highly the opportunities to interact with Japanese companies through Professor Kakuwa's course on the context of Japanese business and stakeholders and through my GraSPP-supported internship at the Sumitomo Mitsui Banking Corporation. I believe that the main contribution of a Public Policy professional resides in being able to identify different stakeholder's views and try to bridge gaps when they occur. By offering venues like company visits, internships and lectures by practitioners, GraSPP effectively denies a narrow view of public policy (i.e. matters of governments and international organizations) and encourages us to think beyond our academic/policy-oriented perspective, which greatly contributes to our professional (and I dare say, personal) growth.

It was also rewarding to witness the expansion of the GraSPP community during these years, both with the increasing outreach of alumni and with the attention to student's feedback. I remember, for example, that during the first semesters some of us debated about the MPP/IP course structure and recognized that while the variety in course offering was a great strength for allowing each student to tailor the program to her interests, it could also lead some of us to feel overwhelmed with the multiplicity of choices available. The recently implemented policy stream approach, however, seems to address exactly this issue by balancing freedom of choice with some guidance on course selection and sequencing. Similarly, some of us in the MPP/IP expressed a wish to interact more with GraSPPers who joined the policy programs in Japanese. In this sense, I am very much excited to hear about recent initiatives such as the GraSPP Policy Challenge as a way to build teamwork between Japanese and international students and the Language Table (to promote friendship and language exchange between students). These measures strengthen the identity of our school and send a powerful message regarding how the progressive internationalization of Japanese universities can take place.

My feelings upon graduating last September can perhaps be best described as a mix of accomplishment and gratitude to our dedicated faculty, to the supportive and friendly staff, and to my incredible colleagues, a truly international lot with the most different backgrounds. Giving the current rise of anti-globalist forces around the world, I hold the friendships that we have built and the experiences that we have shared as an invaluable reminder of how much we can thrive on diversity. I highly encourage my friends and colleagues to put into practice what we have learned at GraSPP both inside and outside the classroom and take (perhaps small but yet) confident steps towards a truly multicultural and prosperous world.

「金融商品とフィデューシャリー・デューティ」開催報告

特任准教授 今泉宣親



2016年9月15日、福武ラーニングシアターにおいて「金融商品の販売とフィデューシャリー・デューティ」と題するシンポジウムが開催されました。みずほ証券株式会社の支援を得て2007年度より開講されている寄附講座「資本市場と公共政策」の一環として開催されたもので、天候の思わしくない中でしたが、160名を超える方々に参加いただきました。

英米法における信託義務を意味する「フィデューシャリー・デューティ」については、日本でも信託の受託者や投資運用業、あるいは会社の取締役等の果たすべき責任として議論されてきました。こうした中、近年、金融庁の文書等において、金融商品の販売を担う金融機関が負うべき役割・責任として、「フィデューシャリー・デューティ」が取り上げられる機会が増えてきたため、産官学の有識者が一堂に会して、その意義につき議論することとしたものです。

冒頭挨拶を行った飯塚敏晃院長からは、「日本経済が成熟した現在、1700兆円に及ぶ家計金融資産を有効活用し、個々人の資産形成と経済の持続的発展に繋げていくことは重要であり、個人が資産形成のための金融商品を購入する窓口となる金融機関の役割は小さくない」として、本テーマを議論する意義を指摘しました。

シンポジウムでは、まず本学の神作裕之教授が「金融商品の販売とフィデューシャリー・デューティ：法的観点からの検討」と題する基調講演を行いました。金融商品の販売におけるフィデューシャリー・デューティは、法的規範の話と非法的規範の話の2つを区別しつつ、両者の関係に留意して議論していく必要があることなどが指摘されました。

続いて、金融庁の中島淳一総務企画局審議官が「国民の安定的な資産形成とフィデューシャリー・デューティ」と題する基調講演で、フィデューシャリー・デューティを巡る金融行政の経緯や金融における顧客のベストインタレストに向

けた行動のためのプリンシプルの定着の必要性についてお話しいただきました。

シンポジウムの後半では、基調講演者（神作裕之教授、中島淳一審議官）のほか、本学の小野傑客員教授（西村あさひ法律事務所弁護士）、樋口範雄教授、楠雄治楽天証券株式会社代表取締役社長、幸田博人みずほ証券株式会社代表取締役副社長をパネリストに迎えて、今泉による進行で、1時間半余りにわたりパネル・ディスカッションを行いました。

パネルでは、まず、小野教授より実定法上のフィデューシャリーの議論の必要性、楠社長及び幸田副社長より楽天証券、みずほフィナンシャルグループにおけるフィデューシャリー・デューティを意識した取組事例、樋口教授より英米におけるフィデューシャリー・デューティの議論の概観について、それぞれご紹介いただきました。

その上で、最後に「金融機関が、真に顧客のために活動するための行動規律は何か。特に顧客とのチャンネルになる販売会社の行動規律の在り方とは何か」をテーマに議論を行いました。議論の中では、行政におけるエンフォースメントについての考え、金融業界における現状の問題分析、法律の専門家から見た今後の論点などについて、意見が出されました。

今回の「金融商品の販売とフィデューシャリー・デューティ」というテーマは、今後も、日本の家計金融資産のあり方、ひいては少子高齢化社会の下にあって日本経済が今後どう持続的に成長していくのか、という大きな目標に向けて、法学・行政・金融実務の三者を中心に、議論が深められていくことと思います。その中で、本シンポジウムが一つの機会となり、金融機関のリテールビジネスの発展をはじめとして、金融資本市場のさらなる進化に向けた取組みが加速していくことを強く願う次第です。



公共政策大学院博士後期課程設置— 高度な研究能力を持つ実務家の 育成に向けて

教授 城山 英明

東京大学公共政策大学院は、公務員をはじめとする政策の形成、実施、評価の専門家を養成する専門職学位課程である公共政策学専攻を有する教育組織として、平成16年に設置されました。「国際的視野のもとで現代社会の直面する課題を発見し、課題の解決に必要となる政策と制度を構想する力をもった、時代の要請に応える政策実務家を育成すること」を目的としており、これまで公務員を中心として広く公務に従事する政策実務家を養成してきました。また、平成22年には英語のみで修了可能な国際プログラムコースを設置し、さらに交換留学、ダブルディグリープログラムを幅広く整備することで、留学生の比率も急増しました。

そのような中で、博士課程へ進学し、より高度な教育を受けた上で、社会において実務に関わりたいという海外留学生の希望が増えてきました。実際に、国際機関や各国政府においては博士号取得職員の比率が増えつつあります。これは、日本にとっても国際交渉等における相手方の高学歴化が進

んでいることを意味し、このような国際的な政策コミュニティの一員となり影響力を発揮するために、同等レベルの能力を制度的に裏打ちされた形で確保することが必要なのは、各省庁等の担当者においても認識されてきています。政策実務家を育成するという公共政策大学院のミッションの観点からも、より高度な教育を提供する積極的な方策が必要であると考えられました。そこで、高度な研究能力を持ち、研究を基盤として独創的な課題設定を行い、様々な専門的知見を組み合わせて解決策を構築・評価し、更に、国際的な視点を持ってそれを迅速に実施できる人材の育成を目的として、公共政策大学院に英語を基礎とする小規模な博士後期課程(年間定員6人)を平成28年から設置することとしました。

本博士後期課程における主要対象分野は、国際金融・開発分野、国際安全保障分野です。国際環境や国際的連携の下で実施される国内公共政策も含めた、幅広い国際公共政策を対象とします。法学政治学、経済学のいずれかの専門分野を学問的基礎とした上で、学際的視点を踏まえた研究を実務とも交流しつつ進めていくことが期待されており、カリキュラムにおいてもそのような観点から工夫が行われています。安全保障分野では、例えば、非伝統的な安全保障として、エネルギー・食料・水・鉱物資源・経済的サプライチェーンの供給リスク、自然災害・感染症・温暖化等の環境変動、科学技術の利用に伴う安全リスク等への対応が求められていますが、このような新しい実務的に重要な分野も対象となります。公共政策大学院では、文理横断型のオールラウンド型博士課程教育リーディングプログラム(社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム)を幹事部局として実施してきていますが、この経験を踏まえて理系との接点を含む学際的視点も埋め込んでいきたいと考えています。



TOPICS

新設された博士課程のパンフレットとポスターが完成しました。ポスターとパンフレットの表紙は、本学のシンボルである赤門を効果的に配置した、視覚的にも訴求力の強いデザインとなっています。(赤門の後ろでは、GraSPPの新しい本拠地となる新棟が現在建設されています。)少し先ですが、2017年9月入学の出願期間は4月3日～5月2日です。

<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/en/education/doctoral-course/>



編集後記

あっという間に新年を迎えました。この冬は比較的暖かく、マフラーをしていると汗ばむほど。とはいえ、油断するとすぐに風邪を引いてしまい、体調管理が難しい季節です。(編集担当)

vol. 46 NEWS LETTER

【編集・発行】東京大学公共政策大学院 【発行日】2017年1月4日

113-0033 東京都文京区本郷7-3-1
E-mail grasppnl@pp.u-tokyo.ac.jp
<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/>